

『ごん狐』をめぐる

安藤 重和
(国語教室)

一、

『ごん狐』は第二次『赤い鳥』の昭和七年一月号に発表されており、作者新美南吉が十八才の時の作品であった。いかに新美南吉が天才的童話作家であったとは言え、十八才という若い時期の創作であったせいか、この作品には作品構成上の弱点がいくつか内包されているようである。なお、本稿では『ごん狐』のテキストとして、第二次『赤い鳥』に発表されたものを用いる。これには鈴木三重吉の手が加わっているけれど、だからといって、新美南吉の「草稿」を考察の対象にすることは、それが未発表のものであるだけにためらわれるのである。第二次『赤い鳥』発表時の作品には鈴木三重吉の手が入っているからといって、新美南吉がその点で鈴木三重吉に抗議したとも聞かない。恐らく新美南吉も第二次『赤い鳥』発表時のものを「自分の作品」として認知していたのであろう。以下、第二次『赤い鳥』に発表された『ごん狐』の本文を対象とする作品研究に移りたい。

二、

『ごん狐』の最後の場面で、「ごん」は「兵十」に「火縄銃」で

撃たれてしまう。「兵十」が「はりきり網」で折角捕えた「うなぎ」をいたずら半分で逃がしてしまった「ごん」であったけれど、「ごん」はその事を深く反省して「つぐなひ」をすべく毎日「兵十」の家へ「栗」や「まつたけ」を持って行っていた。「ごん」が撃たれた時も、「兵十」の家へ「栗」を運んで行って帰ろうとした時であった。以前の「いたづら」を悔い改め「つぐなひ」の行動をしている「ごん」が、「おれと同じ一人ぼちの兵十か」とこの世で唯一人一体感を生じていた他ならぬ「兵十」の手によって撃たれてしまう。これは何故だ、何故撃たれねばならないのだ、という疑問が、「ごん」の死を目の前にしてのやりきれない気持の中から、必然的に浮上する。

だから、『ごん狐』を読解する場合、必ず、「ごん」の撃たれざるを得なかった必然性をさぐるうとするレヴェルから出発する。だが、実を言えば、この問題設定は性急に過ぎる。この『ごん狐』という作品の場合、作品の完成度に対する吟味も必要であると思われるのである。作者が天才的童話作家と言われる新美南吉であることも、又、この作品に対する世間の評価が高いことも、いささかもこの作品の完成度を保証するものではない。だから、この作品を名作童話として最初から決めてかかる読み方は慎まなければならない。

「どん」が撃たれてしまうのは、作品の内的必然性に支えられているのであろうか。この点の吟味の為に『こん狐』の最後の場面を次に引用する。

そのあくる日もどんは、栗をもつて、兵十の家へ出かけました。兵十は物置で縄をなつてゐました。それでどんは家の裏口からこつそり中へはいりました。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へはいったではありませんか。こなひだうなぎをぬすみやがつたあのどん狐めが、またいたづらをしに來たな。

「ようし。」

兵十は、立ちあがつて、納屋にかけてある火縄銃をとつて、火薬をつめました。

そして足音をしのばせてちかよつて、今戸口を出ようとすると、どんを、ドンと、うちました。どんは、ぱたりとたはれました。家の中を見ると土間に栗が、かためておいてあるのが目につきました。

「おや。」と兵十は、びつくりしてどんに目を落しました。

「どん、お前だったのか。いつも栗をくれたのは。」

どんは、ぐつたりと目をつぶつたまゝ、うなづきました。

兵十は、火縄銃をぱたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口から細く出てゐました。

「どん」が「兵十」に撃たれたのは「兵十」に見つかったからであつた。たとえ「どん」の気持ちも「兵十」に伝わっていなくとも、見つからなければ撃たれはしなかつた。では何故「どん」は見つかったのかということになるが、その前に、「どん」は今まで毎日「兵十」の家に「栗」を運んでいたのに何故これまで見つからずにすん

だのかと発問して見よう。この答えは直ちに出来る。最後の場面に明白に描かれている「どん」の訪れ方の慎重さに気付けばよい。

兵十は物置で縄をなつてゐました。それでどんは家の裏口から、こつそり中へはいりました。

「どん」は最初に「兵十」の居場所を確認し、その後、どこからはいれば見つからないかを検討し、見つからない入口として「家の裏口」を選んでゐるのである。「それで」という三文字に留意すべきである。「どん」が「家の表口」からはいらなかったのは、表口が見つかりやすい入口であつたからに他ならない。「どん」は自分が「兵十」に見つからないように、自分の方で先に「兵十」を見つけてしまふ。そして「兵十」の位置から見えない入口を選び家の中へはいる。この用心深いはいり方をすれば、「兵十」に見つかるとは、このようない理由があつたと見てよい。「どん」が「兵十」の家に「いわし」を投げ込んだ時も、それ以前に、「物置の後」から、「兵十」が「赤い井戸」のところで、麦をといでゐる姿を見ていたから、「家の裏口」から投げ込んだのである。「表に赤い井戸のある、兵十の家」という部分から「兵十」が表の方にいた事は明らかである。又、その次の日に「栗」を持っていって時、「兵十」が家の中にいたからこそ、「どん」は見つからないように「そつと物置の方へまはつて、その入口に栗をおい」たのである。どんは、「入口」を選ぶだけでなく「栗の置き場所」をも選定しているのである。最後の場面では「どん」が「栗」を「家の中の土間」に置いたのは「物置」に兵十がいたからである。

では何故、最後の場面では見つかつてしまったのか。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へはいつ

たではありませんか。

と描写されているが、これは救い難い矛盾であろう。「ごん」は「兵十」に見つからないように「家の裏口」を選んだはずである。それなのに、「兵十」が「ふと顔をあげ」た程度で、「ごん」が見つけられてしまったという。それでは「ごん」は余程「兵十」から見つかりやすい入口を選んだことになってしまう。用心深く行動している「ごん」はこの場面でも本来見つけれられるはずはないのである。当然、「兵十」に銃で撃たれるはずもなかった。なのに、撃たれたことになっているのはこの作品の最大の弱点である。

しかし、弱点はまだ続く。

「ようし。」

兵十は、立ちあがつて、納屋にかけてあつた火縄銃をとつて、火薬をつめました。そして足音をしのばせてちかよつて、今戸口を出ようとするとごんを、ドンと、うちました。

「兵十」が縄をなっていた所は「物置」と書かれていた。今、「火縄銃」のかけてある場所は「納屋」と書かれている。そこで読者は「物置」と「納屋」が同一の建物なのか否かとまどうことになる。そこで新美南吉の草稿を見ると「兵十は、納屋で縄をなつてゐました」「丁度納屋にかけてあつた火縄銃」となっているので同一建物と知られる。草稿には「物置」という語は一度も使われず全て「納屋」となっている。それを鈴木三重吉が「物置」という語に直したのだけれど、最後に出てくる「納屋」だけを「物置」と直すことを忘れてしまったのであろう。だから、この点は新美南吉に責任はないのだが。

さて、これはともかくとして、一体、「火縄銃」の撃ち方を新美南吉は知らないであろうか。「火薬」を銃につめればそれで撃て

るというものではない。当然の事ながら弾丸を込めなければならぬし、何よりも先ず、「火縄」に「火」をつけねばならない。その「火」が「物置」にあったとは思えない。冬ならば「火鉢」にあたりながら縄をなうこともあろうが「秋」にはあり得ない。当時、火をおこす為には、火打石・火打金・火口ほくちの一セットが不可欠であった。火打石と火打金を打ち合わせて火の粉ほこを作り、その火の粉を火口に受けて注意深く消えてしまわないように火を作つてゆく。その火を充分に火縄に移し火縄の先端が赤くなつてこないと火縄銃がうまく発射できないのである。当時貴重であつた火打道具が物置などに置いてあつたとは思えにくい、仮りにあつたにしても、このように発射までに手間のかかるのが火縄銃であつた。ことわつておくが、火縄に点火したまま保存してあつたなどということはあり得ない。銃を使用しない時は火縄も消しておくのである。

一方、「ごん」は「裏口」をはいるところを「兵十」に見つけられたことになっているが、その後、「ごん」が「小さな、これはかけた家」の土間に「栗」を置いて帰るだけの単純な動作するのにどれほどの時間が要するであろう。一分もあれば充分過ぎるはずであるが、「火縄銃」の発射準備を一分で完了することは絶対に不可能なのである。「ごん」は、たとえ見つかったとしても銃撃されるはずはなかつたのである。

以上見て来た如く、「ごん」は「兵十」に見つけられるはずはなかつたし、又、仮りに見つけれられたとしても銃が「火縄銃」である限りそれで撃たれるということもあり得なかつた。

それなのに「ごん」が撃たれたのは、作品の内的必然性が無視された結果に他ならない。

「ごん」の気持ち「兵十」に伝わつていてもいなくても「兵十」

に見つかりさえしなければ、「ごん」は撃たれようがなかった。又、「ごん」の気持ちが事前に「兵十」に伝わっていれば、見つかったも撃たれるはずがなかった。「ごん」の気持ちが「兵十」に通じていなくて、しかも「ごん」が「兵十」に見つかった場合のみ、「ごん」は撃たれるのである。図示すれば、次のようになる。

気持ちに通じていない	見つかる	見つからない
	撃たれない	撃たれない
気持ちに通じている	撃たれる	撃たれない

この作品の流れから考えれば、「ごん」は見つかるはずがなかった。だから、本来的に「ごん」が撃たれることは封じられているはずであった。それが最後の場面で無視された結果、「ごん」は撃たれたのだ。

撃たれるはずのない「ごん」が撃たれているのだから、何故「ごん」は撃たれねばならなかったのか、という発問自体が無意味で、それに解答することなどもと不可能なのである。

西郷竹彦氏は

作品「ごんぎつね」に描かれた「現実」は、さきに述べたとおりごんのがわからの一方的な近づくでしかなく、本来ならばたがいにかかりあえるはずなのに、ついに殺し殺されるという悲劇にしかならないという現実なのです。(略)この作品の世界は「城」というものに象徴されているような封建的な時代・社会であり権力支配下にある村共同体のはらむ矛盾(連帯と疎外)

の状況です。ここに悲劇をひきおこす真の根元があるのです。⁽²⁾と言われるが理解に苦しむ。この論法でいくと封建時代でなければ人々は互いにわかりあえるということになりそうであるが、資本主義時代の今日でも互いにわかりあうことなどなかなかできないではないか。封建時代が「ごん」を「殺し」たわけではさらさらでない。

三、

ここで、発問を変えよう。「何故「ごん」の気持ちが「兵十」に通じなかったのか」と。作品の内的意味との関連で言えばこの発問の方がはるかに重要である。撃たれたことばかりが「悲劇」ではない。たとえ撃たれなくとも心を通じさせることができている状態はやはり「悲劇」にちがいないまい。

さて、この発問に答える為には「ごん」が狐なのか人間なのかという視点が不可欠である。藤原和好氏は、

ところで、このような偶然的重なりを、大きな悲劇(ごんの死)へと展開させた真の原因は何か。それは結局、兵十が人間、中山に住む人間であり、ごんが中山には住んでいないきつねであるということ、つまり、二人は、異質の世界に住む異質の人間であるということにある。⁽³⁾(傍線筆者)

と言われるが、「きつね」が何故「人間」になってしまったのか不審である。「ごん」は狐か人間か、という点をもっと慎重に見定めよう。

「ごん」は、「菜種がらの、ほしてあるのへ火をつけ」ているし、人間の会話を聞いて内容を理解している。これらのことは野生動物としての狐にできることではなく、人間の行動である。又、狐の手は犬の手と同じ形なので、物を「つかむ」動作は不可能なのだけれど、「ごんはびくの中の魚をつかみ出しては」とあるので、「ごん」

の手は恐らく人間の手と同様な形状で考えられているのであろう。このように、「ごん」が単なる狐ではないことは明らかである。又、全くの人間でもない。「しだの一ぱいしげつた森の中に穴をはって住んでゐました」「ごんはじれつたくなつて、頭をびくの中につつこんで、うなぎの頭を口にくはへました」「ごんはそのまゝ横つとびにとび出して」「ごんは、ほつとして、うなぎの頭をかみくだき」等の描写は野生動物としての狐の動作である。

つまり、「ごん」は「人間」としての側面と「狐」としての側面をあわせ持っている存在と言える。この点が重要である。

さて、前述の「何故『ごん』の気持ち」が「兵十」に通じなかったのか」という問題に帰ろう。気持ちが通じるか否かは、結局のところ、伝達手段の問題に帰する。人間は、伝達手段として、文字言語・音声言語・動作言語の三つを持つ。だが「ごん」は、文字も書けないし人間の言葉も話せない。「ごん」の側から「兵十」に働きかける方法として残されているのは動作言語のみであった。伝達手段の点では「ごん」はまさに「狐」でしかなかった。さて、動作言語は相手に自分の動作を見せられて始めて伝達が成立するというのが原則である。「いたづらばかり」していた前科を持つ「ごん」は人間の目の前へ出て堂々と行動するということがなかった。「うなぎ」をとって来たことを深く悔いている「ごん」は特に「兵十」の目から隠れた。この点が動作言語しか持たない「ごん」にとって致命的な点であった。

実を言えば、「ごん」の気持ちを「兵十」に伝える為には誠に簡単な動作でことたりたのである。「ごん」が栗をかかえている姿を「兵十」に見てもらっただけで充分であった。見てもらふことなく毎日「兵十」の家に栗を「ごん」が運んだとて、「お母が死んでから

は、だ・れ・だ・か・知・ら・ん・が、おれに栗やまつたけなんかを、まいにちまいにちくれるんだよ」という「兵十」のとまどいを強めることにしかならなかった。

無論、「ごん」が栗をかかえて「兵十」の前に現われなくても、「兵十」が栗を運ぶ「ごん」の姿を目撃すれば、「ごん」の気持ちが「兵十」に伝わったであらう。だから、最後の場面で、「ごん」が「兵十」の家の裏口から、こつそり中へはいるところを、発見された瞬間こそ、実は、「ごん」の気持ちが「兵十」に通じ得る最大のチャンスであった。その時、「ごん」は「栗」をかかえていた。そして「ごん」は「兵十」に見つかっている。だが、悲しいことに「兵十」は「栗」を見なかったのである。「ごん」の後半分を目撃して、肝心の「栗」を抱えている前半分を見ることができなかった。前半分は既に家の中に入っていて見えなかったであらう。が「ふと顔をあげ」るのがもう一瞬早かったら、「兵十」は「ごん」のかかえる「栗」を見ただらう。一瞬の時間の差によって、「ごん」の運命は明暗を分けたのである。

このように、「ごん」が「兵十」に見つかった場面は重要であるのに、新美南吉の描写は極めて不親切で、「ごん」が「兵十」に見つかったら撃たれる他なかったかのような書きぶりがされ、実はその場面には「ごん」の気持ちが「兵十」に通じる最大のチャンスが可能性として内包されていたことへの配慮が感じられない点、この作品の弱点の一つと言える。

四、

さて、今まで無反省に「いたづらばかりし」て来た「ごん」が、何故、今回「兵十」のとらえた「うなぎ」を「とつて来てしまった」

ことに對しては深く反省をしたのであろうか。「兵十のお母は床についてゐて、うなぎが食べたいと言つたにちがひない。それで兵十がはりきり網をもち出したんだ。ところが、わしがいたづらをして、うなぎをとつて来てしまつた。だから兵十は、お母にうなぎを食べさせることが出来なかつた。そのまゝお母は、死んぢやつたにちがひない。あゝ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもひながら、死んだんだらう。ちよつ、あんないたづらをしなけりやよかつた」と深刻に反省する「ごん」であつたが、これは「ごん」が勝手にそう思い込んでゐるのに過ぎない。この反省は「ごん」が「うなぎ」をとつて来た日から「十日ほど」経つた頃、「兵十のお母」の葬式を見た後になされてゐるが、田舎では死後二日か三日で葬式がおこなわれるので、「兵十」のうなぎを「ごん」がとつて来てから「兵十のお母」が死ぬまでに約一週間ほど時間があつたことになる。「兵十のお母」が仮りにそれほど「うなぎ」を食べたがつたのなら、一週間のうちに、「兵十」が自分で「はりきり網」を仕掛けるなり、他から入手するなりして、「うなぎ」を食べさせたと考える方が可能性としては大きいはずである。大体、「兵十のお母」が「うなぎ」を好きであつたか否かさえ不明であるのだ。だから、「ごん」の反省は必要以上に自分のいたづらの影響を過大に評価し、自分自身を責めたてるものになつてゐるのである。何故、今回に限つて、これまで自分を責めるのか。それは「ごん」の反省が、「はゝん、死んだのは兵十のお母だ」と「ごん」が認識した晩になされてゐることから知られよう。

兵十は今まで、お母と二人きりで貧しいくらしをしてゐたもので、お母が死んでしまつては、もう一人ぼつちでした。
「おれと同じ一人ぼつちの兵十か」

という文章が、「ごん」が反省をおこなつた後の場面で書かれてゐるけれど、実は「ごん」が、「おれと同じ一人ぼつちの兵十か」と感じたのは、反省をおこなう前に「はゝん、死んだのは兵十のお母だ」と認識した時点であつたはずである(つまり、「一人きり」のうち、一人が死ねば「一人ぼつち」になるのは当然なのだから)。

「兵十」が「お母」と「二人きり」で暮らしてゐたことを、「ごん」は既に以前から知つてゐたような描写がなされてゐるのであり、反省をおこなつた時点以後始めて知つたような描写にはなつてゐないのである。「おれと同じ一人ぼつちの兵十か」という認識があつたからこそ、「ごん」は今では「おれと同じ一人ぼつち」になつてしまつてゐる「兵十」に對して「十日ほど」前になつてしまつた「いたづら」を深く悔むのであつた。なるほど、「ごん」が「うなぎ」をとつた時点では「兵十」は一人ぼつちではなかつた。しかし、葬列の中で「白いかみしもをつけて、位牌をさゝげて」ゐる凶徒の「兵十」は、まさに「一人ぼつち」、それは「一人ぼつちの小狐」である。「ごん」が一体感を生じ得る恐らくこの世で始めての対象であつたはずである。よりによつてその人に対し、自分はいよいよ十日前に「いたづら」をしてしまつてゐる。「ごん」を「兵十」から遠ざける障害物となつてしまつた「いたづら」を「ごん」は深く悔む。悔みの深さは、「ごん」が「兵十」という「おれと同じ」存在に親近したいと思ふ思いの強さに比例する。「あんないたづらをしていなければ」という無念の思いが、「いたづら」の持つマイナスの意味を過度に評価させることになる。だから、「いたづら」の影響について「ごん」は最悪の事態を想定し、それにちがいないと思ひ込み、自分を責めたてることになる。それだけに、この反省は徹底したものになる。今まで、ついぞ考えもしなかつた「つぐなひ」とい

う発想が浮上してくる。「いたづら」を「つぐな」うことにより、「ごん」と「兵十」の間に横たわる障害を取り除こうとするわけである。又、「ごん」が自分の「いたづら」を過大に評価し自分を責めたてたことは、「ごん」をして「兵十」に合わせる顔をなくさしめてしまふのであり、親近したい「兵十」から逆に姿を隠してしまふという矛盾した行動をとらせることになる。姿を隠しつつも親近したい思いを禁じ得ない「ごん」の悲しい姿は、「吉兵衛の家」の「おねんぶつ」から帰る「兵十」の影法師をふみ／＼について行く「ごん」の姿に典型化されている。

「ごん」が「うなぎのつぐなひ」に毎日「栗」を運んで行ったのは、「ごん」が「いたづら」を許してもらって「兵十」に親近したかったからであり、たとえその行為を「神様」のせいにされて自分に御礼を言ってもらえなくても、やはり「ごん」は栗を運び続けるしかないのである。「一人ぼっちの小狐」である「ごん」は、「おれと同じ」存在と認識し得る唯一の存在である「兵十」とのかかわりを放棄する気にはなり得ないのである。

さて、このように「ごん」の心理を分析してみると、これはまさしく「孤独な人間」の微妙な心理そのものであるといつてよいと思われる。前述した如く「ごん」は伝達手段のレヴェルではまさに「狐」であつたけれど、「心」のレヴェルでは明らかに「人間」であつたのである。「孤独」をいやすために「ごん」が求めたのが、仲間の「狐」ではなく「兵十」という「人間」であつたことからそれは明らかである。

「狐」と「人間」の両側面を持つ「ごん」は心のレヴェルでは「人間」であつて「人間」に親近感を生じ、その心を「人間」に伝えるレヴェルでは「狐」でしかなかった。そのことが「ごん」の不幸

の基底をなしている。その際、当時「封建時代」であつたことなど「ごん」の不幸に殆ど関係はなかつたのである。

五、

以上、「ごん」は本来「兵十」に撃たれるはずはなかつたことを指摘し、続いて、「ごん」と「兵十」が理解しあえなかつた原因、「いたづら」に無反省であつた「ごん」が「兵十」の「うなぎ」をとつた件についてのみ深刻に反省した理由について考察を加えてみた。

大方の御批正を乞う次第である。

(昭和58年8月31日受理)

注

- (1) 『ごん狐』の草稿は、西郷竹彦氏著『教師のための文芸学入門』(明治図書出版 昭43)の参考資料として収載されている。

- (2) 注(1)書 一九六頁

- (3) 『小学校国語科教材研究演習』(くろしお出版 昭51)二三頁だから、「おれと同じ一人ぼっちの兵十か」という重要語句は、「はゝん死んだのは兵十のお母だ」という部分に続けて書かれるべきであつた。「ごん」が深刻な反省をおこなつた後の時点で書かれねばならぬ必然性は存在しない。